

6 10月振り返り期間についてアンケート

夏季休業中の学習状況と9月実力考査との関連について自己分析し、2学期各教科の目標設定を立てた上で、10月振り返り期間への意識・学習状況の改善が見られたかどうかを調査した（資料24）。

結果は資料25・26である。「全くできなかった」「できないことの方が多かった」が計48.6%と約半数の生徒が取り組み状況が悪かったと回答した。理由の主なものは「部活動など学習以外のことを優先させたから」が51%と最も高く、部活と勉強の両立ができていない生徒が多いことが分かる。部活動が中止となる通常の考査期間とは違い、授業と部活動が継続する中で振り返りを行うことは、「勉強に取り組めないのは部活動があるから」といったような心理的な逃げ道を作ってしまうことにつながっているのではないかと考えられる。

8月に実施した、夏季休業中の過ごし方についてのアンケートにおいて割合の高かった「教科書の見直し」「問題集等の見直しや解き直し」や、「授業に集中する」「理解できるよう質問し解決する」といった授業に関する取り組み向上の意識を、ただ言葉だけではなく実行にまで移させるために、指導の改善が必要なのは明白である。また、「特に理由はなく怠けていたから」と回答した生徒も35.2%と高く、いかに意識を高めさせるか、いかに取り組ませるかを検討し対応しなければならない。また、振り返り期間の在り方について再検討していく必要性も感じられる結果となった。

資料24 10月振り返り期間についてアンケート

10月振り返り期間について	
「2学期各教科の目標（知識・技能の習得を目指して）」を立てて取り組んだ上で、振り返りテストを受けたことについて、あなたの状況を教えてください。	
fukuju-keiko@kago.ed.jp アカウントを切り替える	
共有なし	
* 必須の質問です	
問1 あなたの出席番号（必ず半角数字で）を教えてください。*	
例：3年7組20番 → 3720	
回答を入力	
問2 2学期になってから（9月体育祭後から）「2学期各教科の目標（知識・技能の習得を目指して）」を意識して学習（授業や自宅学習）に取り組むことができましたか。	
☐ 全くできなかった → 問3へ	
☐ できないことの方が多かった → 問3へ	
☐ できることが多かった → 問5へ	
☐ よくできた → 問5へ	
問3 問2において「全くできなかった」「できないことの方が多かった」と回答した人に聞きます。なぜ「できなかった」のですか。	
☐ 学習する必要がない（学習することに意義を見いだせない）から。	
☐ やってできないから。	
☐ 部活動など学習以外のことを優先させたから。	
☐ 怪我や病気、悩み（人間関係や家庭のことなど）のため、学習できなかったから。	
☐ 特に理由はなく怠けていたから。	
☐ その他 → 問4へ	
問4 問3において「その他」と回答した人に聞きます。その他の具体的内容を可能な範囲で教えてください。	
回答を入力	
問5 問2において「できることが多かった」「よくできた」と回答した人に聞きます。目標を立て意識して学習したことで、振り返りテストの結果はどうなったと思いますか（結果がまだ分からないものは、手応えがあったかどうかで回答してください）。	
☐ 目標を立てて取り組んでも、目標を立てない時と変わらないもしくは悪い結果だった。	
☐ 目標を立てて取り組んだことで、目標を立てない時より結果はよかった。	

一方では、「できることが多かった」「よくできた」との回答が51.4%であり、「目標を立てて取り組んだことで、目標を立てない時より結果はよかった」と76.5%の生徒が回答している。このような生徒には、今回の目標を立てた取り組みは有効であったと考えられる。

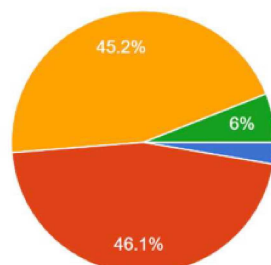
なお、今回のアンケートは目標を意識して取り組めたか、目標を立てて取り組んだ結果はどうだったかを問うものであり、知識・技能を習得できたかを問うものではなかった。また、振り返り期間における単元テスト等は知識・技能を問うだけではなく、当然思考・判断・表現を問うものも含まれる。そのため、知識・技能の習得を目指して2学期各教科の目標を立てた結果知識・技能が習得できていたかは、各教科での把握に留まっている。各教科から情報を収集し、今後の係としての取り組みに活かしていく。

資料25 10月振り返り期間についてアンケート結果

10月振り返り期間について（結果）

問2 2学期になってから（9月体育祭後から）...業や自宅学習）に取り組むことができましたか。

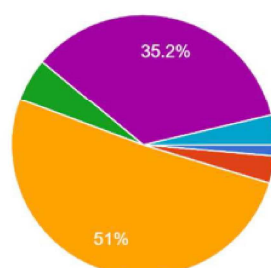
599 件の回答



- 全くできなかった → 問3へ
- できないことの方が多かった → 問3へ
- できることが多かった → 問5へ
- よくできた → 問5へ

問3 問2において「全くできなかった」「でき...人に聞きます。なぜ「できなかった」のですか。

298 件の回答



- 学習する必要がある（学習することに意義を見いだせない）から。
- やってもできないから。
- 部活動など学習以外のことを優先させたから。
- 怪我や病気、悩み（人間関係や家庭のことなど）のため、学習できなかったから。
- 特に理由はなく怠けていたから。
- その他 → 問4へ

問4 その他の内容

受験と重なって何日も前から計画的に勉強することができなかった

受験勉強に集中していた

どんなふうに勉強したらいいか分からなかった。

推薦のための志望理由書や小論文・面接対策を優先したから

教科ごとに偏りがあったから。

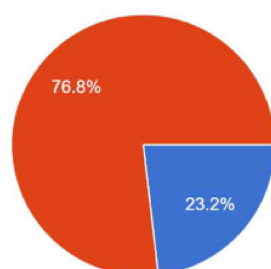
そもそも手元にないから思い出せない

範囲をしっかりと理解してなかったから。

楽しいと思えないから。 やる気が起きた

問5 問2において「できることが多かった」「...手応えがあったかどうかで回答してください）。

315 件の回答



- 目標を立てて取り組んでも、目標を立てない時と変わらないもしくは悪い結果だった。
- 目標を立てて取り組んだことで、目標を立てない時より結果はよかった。

資料26 10月振り返り期間についてアンケート結果

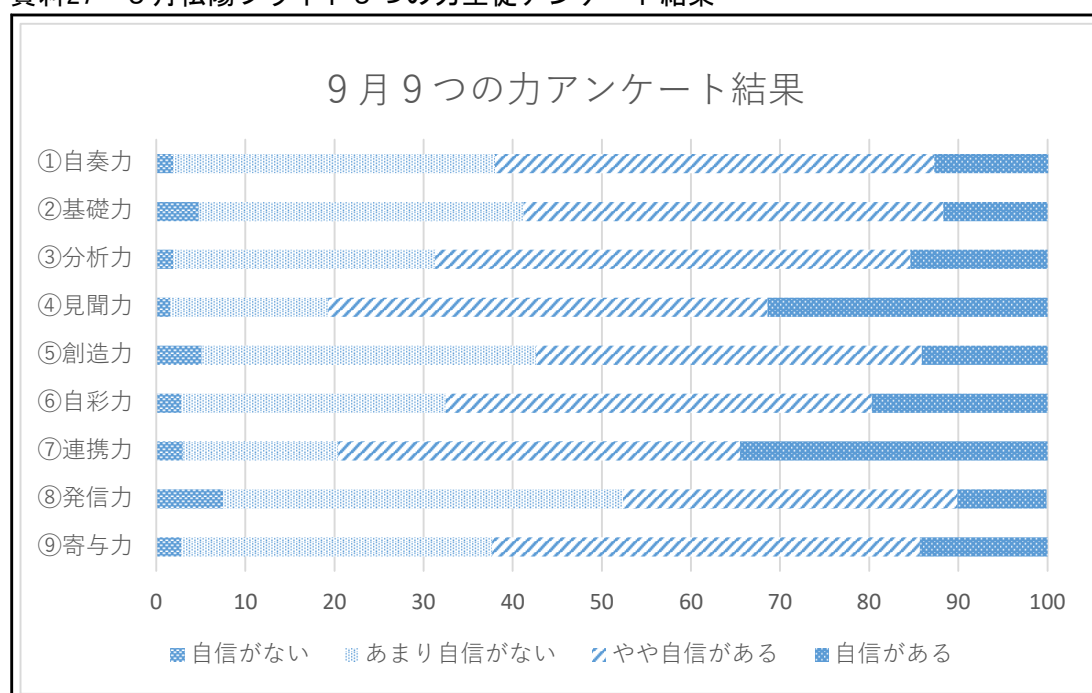
(%)

1 2学期になってから(9月体育祭後から)「2学期各教科の目標(知識・技能の習得を目指して)」を意識して学習(授業や自宅学習)に取り組むことができましたか。	
全くできなかった。	2.7
できないことの方が多かった。	46.1
できることが多かった。	45.2
よくできた。	6
2 「全くできなかった」「できないことの方が多かった」と回答した人に聞きます。なぜ「できなかった」のですか。	
学習する必要がある(学習することに意義を見いだせない)から。	1.3
やってもできないから。	3.4
部活動など学習以外のことを優先させたから。	51
怪我や病気、悩み(人間関係や家庭のことなど)のため、学習できなかったから。	5.4
特に理由はなく怠けていたから。	35.2
3 「できることが多かった」「よくできた」と回答した人に聞きます。目標を立て意識して学習したことで、振り返りテストの結果はどうなったと思いますか(結果がまだ分からないものは、手応えがあったかどうかで回答してください)。	
目標を立てて取り組んでも、目標を立てない時と変わらないもしくは悪い結果だった。	23.2
目標を立てて取り組んだことで、目標を立てない時より結果はよかった。	76.8

7 自己評価アンケート(9月松陽プライド9つの力生徒アンケート)

4月と同内容でアンケートを実施した。結果は資料27である。全体的な傾向、R6年分析、R5・6年度4・9月比較、現時点で最も必要だと考える力についての分析内容は以下の通りである。

資料27 9月松陽プライド9つの力生徒アンケート結果



資料28 松陽プライド9つの力生徒アンケート R5・6年度比較表

「松陽プライド 9つの力」自己評価アンケート結果 (R5.4~R6.9)

単位 (%)

① 自奏力

	R5.4	R5.9	R6.4	R6.9
自信がない	2.6	4	2.7	1.9
あまり自信がない	33.9	37.1	30.6	36.1
やや自信がある	48.6	47.2	52.4	49.3
自信がある	14.9	11.7	14.4	12.8
自信がある合計	63.5	58.9	66.8	62.1
R6.4とR6.9の比較→				-4.7

② 基礎力

	R5.4	R5.9	R6.4	R6.9
自信がない	3.1	5	1.9	4.8
あまり自信がない	30.5	39.9	34.5	36.4
やや自信がある	51.6	43	49.5	47.1
自信がある	14.8	12.1	14	11.7
自信がある合計	66.4	55.1	63.5	58.8
				-4.7

③ 分析力

	R5.4	R5.9	R6.4	R6.9
自信がない	4	3.3	2.4	1.9
あまり自信がない	30.3	33.2	27.3	29.4
やや自信がある	52.8	49.5	54.1	53.3
自信がある	12.9	14	16.2	15.4
自信がある合計	65.7	63.5	70.3	68.7
				-1.6

④ 見聞力

	R5.4	R5.9	R6.4	R6.9
自信がない	2	2.2	1.4	1.6
あまり自信がない	18.2	18.6	16.6	17.7
やや自信がある	52.9	52.9	52.2	49.3
自信がある	26.9	26.3	29.8	31.4
自信がある合計	79.8	79.2	82	80.7
				-1.3

⑤ 創造力

	R5.4	R5.9	R6.4	R6.9
自信がない	4	4	2.4	5.1
あまり自信がない	38.5	45.7	39.9	37.5
やや自信がある	44.8	40.5	44.3	43.3
自信がある	12.7	9.8	13.4	14.1
自信がある合計	57.5	50.3	57.7	57.4
				-0.3

⑥ 自彩力

	R5.4	R5.9	R6.4	R6.9
自信がない	3.3	3.2	2.1	2.8
あまり自信がない	32.1	31.9	27.4	29.7
やや自信がある	45.7	46.7	49.5	47.8
自信がある	18.9	18.2	21	19.7
自信がある合計	64.6	64.9	70.5	67.5
				-3

⑦ 連携力

	R5.4	R5.9	R6.4	R6.9
自信がない	3	3.6	3	3
あまり自信がない	17	18.9	17.5	17.4
やや自信がある	47.6	48.2	45	45.1
自信がある	32.4	29.3	34.5	34.5
自信がある合計	80	77.5	79.5	79.6
				0.1

⑧ 発信力

	R5.4	R5.9	R6.4	R6.9
自信がない	8	7.6	8	7.5
あまり自信がない	40.8	48.9	41	44.9
やや自信がある	42.2	35.8	39.1	37.5
自信がある	9	7.7	11.8	10
自信がある合計	51.2	43.5	50.9	47.5
				-3.4

⑨ 寄与力

	R5.4	R5.9	R6.4	R6.9
自信がない	4.4	6.2	4.1	2.8
あまり自信がない	30.9	31.6	30	34.9
やや自信がある	47.2	48.3	49.8	48
自信がある	17.5	13.9	16.1	14.3
自信がある合計	64.7	62.2	65.9	62.3
				-3.6

【現時点で最も必要だと考える力】

	R6.4	R6.9	↓ R6.4とR6.9の比較
①自奏力	14	12	-2
②基礎力	18.6	18.6	0
③分析力	5.4	5.1	-0.3
④見聞力	6.2	8.3	2.1
⑤創造力	6.8	9.6	2.8
⑥自彩力	8.5	8	-0.5
⑦連携力	26.8	27.8	1
⑧発信力	10.6	8.1	-2.5
⑨寄与力	3.2	2.6	-0.6

「自信がある合計」数値比較

単位 (%)

① 自奏力

	4月	9月
R 5	63.5	58.9
R 6	66.8	62.1

② 基礎力

	4月	9月
R 5	66.4	55.1
R 6	63.5	58.8

③ 分析力

	4月	9月
R 5	65.7	63.5
R 6	70.3	68.7

④ 見聞力

	4月	9月
R 5	79.8	79.2
R 6	82	80.7

⑤ 創造力

	4月	9月
R 5	57.5	50.3
R 6	57.7	57.4

⑥ 自彩力

	4月	9月
R 5	64.6	64.9
R 6	70.5	67.5

⑦ 連携力

	4月	9月
R 5	80	77.5
R 6	79.5	79.6

⑧ 発信力

	4月	9月
R 5	51.2	43.5
R 6	50.9	47.5

⑨ 寄与力

	4月	9月
R 5	64.7	62.2
R 6	65.9	62.3

全体的な傾向

「(今の時点でその力に) 自信がある (やや自信がある＋自信がある)」生徒の割合に注目して見ると、概ね、4月より9月の方が数値が低下する傾向があると言える。(R 5の⑥自彩力, R 6の⑦連携力のみ数値が上昇)

R 6について

- (1) ①自奏力・②基礎力の「自信がある」生徒の割合の低下が他と比べて大きい(4.7%低下)。→今後も授業や自宅学習に生徒の意識を向けさせ、実行させる働きかけの継続の必要性
- (2) ⑧発信力に「自信がある」生徒の割合が低い(47.5%。他の力は50%を超えている中、一つだけ50%を切っている)。→協働的な学びに取り組む(他者と伝え合う)機会を増やす必要性
- (3) ⑦連携力：一つだけ4月よりも数値が上がっている(ほぼキープ)。

R 5 (4月→9月) と R 6 (4月→9月) 比較

- (1) ②基礎力：R 5は11.3%低下していたが、R 6は4.7%の低下にとどまる。
- (2) ⑤創造力：R 5は7.2%低下していたが、R 6は0.3%の低下にとどまる。
- (3) ⑧発信力：R 5は7.7%低下していたが、R 6は3.4%の低下にとどまる。

「現時点で最も必要だと考える力(昨年度データなし)」について

上記同様4月と9月で似たような結果が出ている。

- (1) ⑦連携力が4月9月ともに一番高い数値
→4月の時点では「連携力を大事にしていいる人間関係を築こう」という意識が強く、9月の時点では各行事を経験して、「連携力大事だなあ」と実感する生徒が多いのでは。
- (2) ②基礎力の割合に変化はないが、4月同様大事だと思っている割合は高め。
→授業やテストなどをとおして、基礎力の必要性を感じているのではないか。
- (3) ⑤創造力の割合が最も増加している。(2.8%増加)

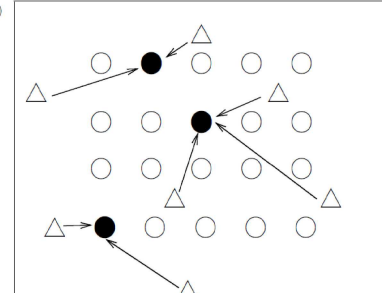
2月に最後のアンケートを実施予定である。4・9月の実施を受けて、各学年の傾向を見るためには学年毎のアンケートが有効だと感じる部分もあるが、今年度は4・9月の実施形態にならない同様に行う。アンケートの結果の分析を教科や学年会等で議題とし、生徒の現状を捉え、課題を意識化するのに役立てていきたい。

なお、今年度アンケートを実施する機会が増えたことにより、回答時間の確保や目的等に関して様々な意見が出た。今後、より効率的で意味を実感できるような実施形態についても考えていきたい。

8 授業研究について

昨年度同様、研究公開時の分科会（授業研究）は全教科形態を統一し、行うこととした。授業研究の流れやねらいについて、資料29を使用し各教科で共有した。

資料29 研究公開時の分科会における授業研究について（一部）

研究開発係 令和6年10月7日 令和6年度研究公開・分科会における授業研究について（案） 昨年度、研究公開時の分科会は「特定した生徒の観察をとおし、指導の手立ての工夫・改善につなげる」という視点で行いました。今年度も同じ内容で進めていきたいと考えています。そこで、この取組の背景と、今年度の実施方法を以下に示します。 0 背景 昨年度では、学び続ける教職員集団を目指す授業研究として、廣瀬氏*（2019）によるInstructional Rounds（インストラクショナル・ラウンズ）の考え方を取り入れ、「子供の学びの姿」に着目した授業研究が行われている。 廣瀬氏は、IRは「学校や教室をつなぎ、訪問者が授業やその研究を通して学び合うことに理論の焦点がある」と述べている。 IRのシステムの特徴の1つに「授業観察はインストラクショナル・コア（Instructional Core）」である、教職員・子供・内容とその相互作用に焦点が置かれる」というものがあり、展開された子供の活動と教職員の言動、学習内容の相互作用に注目し、記述・分析することとしている。 *廣瀬真琴 （鹿児島大学 法文教育学域教育学系 教育学研究科 学校教育実践高度化専攻 准教授）	〔6〕【協議を踏まえて今後の展望を考える】 ○(1)～(5)の活動を踏まえ、今後の指導にむけたアイデア等を出し合う。 ※ 研究の視点に沿って、意見交換を進めてください。 ※ 生徒の姿を具体的に引き上げ、その様子を各自がどのように見取ったのかを共有しながら、互いの教育的鑑識眼を磨き合ひましょう。 ※ 互いの解釈やアイデアを共有しながら、各自の実践に関わる引き出しを増やしましょう。 ※ 目指す姿に迫るためには、今後、何をどうすればよいかを、生徒の視点から考えましょう。 〔7〕【各グループの意見を発表する】 ○代表者が各グループの活動の内容等を発表する。 → 授業者の今後の取組へのヒントとなります。 ※ 授業者は、今後の取組に生かしてください。 ○鹿児島県総合教育センター（研究主事）より ○閉会の挨拶						
1 研究授業～分科会の流れ <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>主な流れ・実施上の留意点</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体会</td> <td> 〔1〕【情報を確認する】全体会の最後、各教科に分かれて実施 各教科研究開発係もしくは公開授業担当者が説明 ・学校の実践上の課題は何か（＝学校レベルで解決に取り組みたいこと） →「令和6年度学校要覧P11～13」参照（全体会の資料には入れます） ・目指している生徒の姿は何か。（＝課題が解決されたと考える生徒の姿） ・生徒の姿へのアプローチ（行動の論理）は何か（＝解決策の見通し） ※ その他、学校で取り組んでいることや課題、授業者の思いや願い、悩みなど ○授業参観する際の生徒を中心に観察するか、参加者を割り振る。 →「2 授業観察について」参照 </td> </tr> <tr> <td>公開授業</td> <td> 〔2〕【公開授業を観察し、観察記録シート（別紙「観察記録シート・分科会模造紙様式」参照）に記録する】 ○授業観察は、授業の忠実（Instructional Core）に注目し、記録する。 「授業の中核」とは ・生徒の言ったことや行ったことの実事 ・教師が言ったことや行ったことの実事 ・学習課題や活動内容の実事 ※ 使用してはいけないNG表現 「～だったと思う」（感想）、「○○のように見えた」（曖昧） 「先生はAすべきだったのに…」・「非常にすばらしいことに…」（価値判断） 「素しそうに…」（印象や解釈） </td> </tr> </tbody> </table>		主な流れ・実施上の留意点	全体会	〔1〕【情報を確認する】全体会の最後、各教科に分かれて実施 各教科研究開発係もしくは公開授業担当者が説明 ・学校の実践上の課題は何か（＝学校レベルで解決に取り組みたいこと） →「令和6年度学校要覧P11～13」参照（全体会の資料には入れます） ・目指している生徒の姿は何か。（＝課題が解決されたと考える生徒の姿） ・生徒の姿へのアプローチ（行動の論理）は何か（＝解決策の見通し） ※ その他、学校で取り組んでいることや課題、授業者の思いや願い、悩みなど ○授業参観する際の生徒を中心に観察するか、参加者を割り振る。 →「2 授業観察について」参照	公開授業	〔2〕【公開授業を観察し、観察記録シート（別紙「観察記録シート・分科会模造紙様式」参照）に記録する】 ○授業観察は、授業の忠実（Instructional Core）に注目し、記録する。 「授業の中核」とは ・生徒の言ったことや行ったことの実事 ・教師が言ったことや行ったことの実事 ・学習課題や活動内容の実事 ※ 使用してはいけないNG表現 「～だったと思う」（感想）、「○○のように見えた」（曖昧） 「先生はAすべきだったのに…」・「非常にすばらしいことに…」（価値判断） 「素しそうに…」（印象や解釈）	2 授業観察について 〔1〕 各教科の研究開発係・公開授業担当の先生へお願い 授業参観する際の生徒を観察するか、参加者の割り振りをお願いします。（参加申込期限後に参加者は連絡します。10月21日（月）頃の予定です）教室のどこにいる生徒なのか、誰がどの生徒を観察するのかなど、配付プリントを準備してください。 ① タイプの異なる生徒を選んでください。 ② グループ活動の場合、必ずしも1グループごとに観察対象者がいる状況にしくなくてもいいです。ただし、観察する際に、教室内で極端に偏った場所に参加者がまどまるることがないように配慮してください。 ③ 当日、観察予定の生徒が欠席の場合、別の生徒を立ててください。 （例）  ●：生徒(特定) ○：生徒 △：教員
	主な流れ・実施上の留意点						
全体会	〔1〕【情報を確認する】全体会の最後、各教科に分かれて実施 各教科研究開発係もしくは公開授業担当者が説明 ・学校の実践上の課題は何か（＝学校レベルで解決に取り組みたいこと） →「令和6年度学校要覧P11～13」参照（全体会の資料には入れます） ・目指している生徒の姿は何か。（＝課題が解決されたと考える生徒の姿） ・生徒の姿へのアプローチ（行動の論理）は何か（＝解決策の見通し） ※ その他、学校で取り組んでいることや課題、授業者の思いや願い、悩みなど ○授業参観する際の生徒を中心に観察するか、参加者を割り振る。 →「2 授業観察について」参照						
公開授業	〔2〕【公開授業を観察し、観察記録シート（別紙「観察記録シート・分科会模造紙様式」参照）に記録する】 ○授業観察は、授業の忠実（Instructional Core）に注目し、記録する。 「授業の中核」とは ・生徒の言ったことや行ったことの実事 ・教師が言ったことや行ったことの実事 ・学習課題や活動内容の実事 ※ 使用してはいけないNG表現 「～だったと思う」（感想）、「○○のように見えた」（曖昧） 「先生はAすべきだったのに…」・「非常にすばらしいことに…」（価値判断） 「素しそうに…」（印象や解釈）						

Ⅶ 成果と課題

今年度係としては、主に生徒の実態把握と学びへの意識化の機会確保に取り組む形となった。それにより教師は、本校生徒に身に付けさせたい力を常に意識して指導に当たることができたと考える。また、「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」を意識しながら、パフォーマンス課題の実践やルーブリック評価の活用をして、知識・技能を身に付ける取組を各教科実践している。ただし知識・技能を定着させることは安易なことではなく、引き続き、知識・技能を定着させる指導や、活用する場面における生徒への支援の手立ての工夫・改善を根気強く継続していく必要がある。最終的に生徒の変容をどのように見取っていくかは今後の課題である。結果として各教科に研究を委ねる形になっているが、各教科の取組を集約することで、来年度につなげていきたい。

またその他の課題として、「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」に取り組む上で、ICTの効果的な活用の仕方や、PDCAサイクルの「D」「A」の取り組みを生徒自身が調整するための指導の工夫、アンケートの実施目的の周知の徹底や、データ蓄積のシステム構築等を進めていきたい。

〈参考文献〉

- 奈須正裕（2017）『「資質・能力」と学びのメカニズム』株式会社東洋館出版社
- 文部科学省（2019）『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編』
- 西川純（2019）『人生100年時代を生き抜く子を育てる！ 個別最適化の教育』学陽書房
- 『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）』令和3年1月26日 中央教育審議会
（2024年5月7日閲覧）
https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf
- 『学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料』（令和3年3月版）文部科学省初等中等教育局教育課程課
（2024年10月5日閲覧）
https://www.mext.go.jp/content/20210428-mxt_kyoiku01-00014639_13.pdf
- 増田謙太郎（2022）『学びのユニバーサルデザインと個別最適な学び』明治図書出版株式会社
- 奈須正裕（2022）『個別最適な学びの足場を組む。』株式会社教育開発研究所
- 西村陽介（2022）『デジタル×アナログ 学びのハイブリッドデザイン』明治図書出版株式会社
- 佐々木潤（2022）『個別最適な学び×協働的な学び×ICT入門』明治図書出版株式会社
- 堂徳将人（2023）『高等学校 ICT活用で実現する 個別最適な学び・協働的な学び』学事出版株式会社